投影同一化と、それに対する container としての治療者の機能不全

～beta 要素を運ぶ救急車と少年～

Projective Identification and The Functional Breakdown of the Therapist as a Container: The case of a boy and an ambulance for beta-elements

黒　崎　優　美

Hiromi Kurosaki

1．はじめに

タイトルからも分かるように、本稿における主要な概念は、「投影同一化」（projective identification）、および Bion による「contained-container」の概念である。本稿の目的は、これらの概念を理論的に整理し、さらに治療場面においてみられた、これらの概念を用いることによって明確にされるであろういくつかの現象について考察することである。

まず、それぞれの概念の持つ理論的背景、意味や目的について、理論的に整理することから始めたい。

2．投影同一化

投影同一化という、現在の対象関係論においては最も一般的であるこの用語は、Klein（1952）によって初めて用いられ、早期、すなわち生後数ヶ月間の情緒的発達の「妄想－分裂的態勢」（paranoid-schizoid position）における、主要な原始的防衛の一部として記述された。乳児は、内在化された死の本能による不安に直面すると、自己を「良い」部分と「悪い」部分とに分裂し、それらの自己部分を外的な対象の中（into）に投影し、その結果、「良い」自己部分を含む対象は「良い」対象として体験され、「悪い」自己部分を含む対象は「悪い」対象として体験されるようになる。また、排出された自己部分対象を支配しコントロールしようとすることにより、乳児は妄想－分裂的態勢を特徴づける迫害不安を体験するようになる。投影同一化は、好ましくない自我の一部分や内的対象、またはその一部分を切り捨て対象の中に投影し、その対象の中で投影した部分をコントロールするという全能的幻想の中にある。

・病的な投影同一化

投影同一化は様々な機能を持つが、そのうち Klein によって「過度な」投影同一化、そして Bion によって「病的な」投影同一化と名付けられたような、ある特殊な機能を持つものが存在する。

病的な投影同一化は、羨望と貪欲が優勢な精神病的パーソナリティによって用いられるが、その場合、攻撃が自己のさまざまな側面に向けられた結果、対象とのつながりはことごとく破壊され、自我は著しく分裂し、自他や内的対象の細かい断片が荒々しく放出され、奇怪な対象が群居する現実を作り上げる。この現実は次第に痛み多い迫害的なものへと変化していき、外部から危険なまでに自己を脅かすようになる。そしてその結果、投影同一化が次々と繰り返されることになる。このような病的な分裂と投影は、知覚と判断の装置をますます損ない、さらなる現実からの引きこもりを招く。

治療関係において、クライアントは頻繁に、この病的な投影同一化を用い、治療者の中に様々な部分対象を投影し、治療者を投影したそのものであるかのように扱うようになるが、このようなクライアントの投影同一化が、治療者にある特殊な反応を引き起こすことがある。それは Grinberg (1983) によって「投影逆同一化」(projective counteridentification) と呼ばれたものである。この治療者の反応は、治療者にとって無意識的なものである。その結果、クライアントは治療者に対して無意識的な圧力をかけ、これに影響されて、治療者は消極的ながらそのような役割や機能、例えば、怒り、抑うつ、不安、退屈などを担うようになり、またそのように振る舞うようになる。

治療関係を維持し、治療的に機能するためには、治療者はクライアントの投影同一化をコンテインし、自身の投影逆同一化的反応を吟味し、理解を深める必要がある。クライアントの投影同一化と治療者の投影逆同一化の分析は、クライアントの葛藤の核心に迫るための重要な手段である (Hafsi, 2000)。

・健康な投影同一化

Bion はこの投影同一化の概念に対して、新しい理解の方法を見出した点において貢献している。すなわち、投影同一化は妄想－分裂的態勢か

ら、Klein（1955）の記述したその次の発達段階である「抑うつ的態勢」（Depressive position）へと移行する間に、新たな機能形態を獲得する。これは発達の可能な、正常な機能を持つ投影同一化の場合であるが、その場合、投影同一化はの持つ機能は、それまで考えられていたような、好ましくない対象を外へ出す「排泄」（Evacuation）だけでなく、人と関わり人を理解すること、すなわち「交流」（Communication）のための主要な一因子となり得ることを示唆した。

3．Contained-Container（♂♀）

Bion（1959）は、Contained と Container の力動的な相互作用を表すのに、「♂♀」という記号を用いた。これは投影同一化の機制を象徴するものであり、また精神分析の一要素を表すものでもある。♂♀は、Bion の個人、また集団理論において、「含むもの」と「含まれるもの」に関する様々な関係を論じる際に用いられるが、ここでは特に母親と乳児の関係について論じたい。なぜなら、後述するあるケースにおけるクライアントと治療者との関係は、まさに♂♀の正常に機能していない母親と乳児の関係によって説明されるようなものであったからである。

乳児にとって飢餓感や痛みは得体の知れない不快さと不安に満ちた何か（Contained♂）として体験される。乳児はこれらに耐えられず、これらを自己のなかに含み込めないため、泣き叫び手足をばたつかせてそれらを外に排泄しようと試みる。やがてそれらは投影同一化を通して、母親の良い乳房という具体的な対象（Container♀）の中に排泄される。母親はこうした乳児の様子を見て、そのような不安や不快の存在と質とを察知し、必要に応じた対応、例えば乳房を与えたりあやしたりする。乳児はここで母親によって不安や不快を和らげられるとともに、その質や程度を理解し始め、それらを自己のなかに含み込むこと（Containment）ができるようになってくる。この関係において Bion が特に Container である母親の機

能として強調したのは、Contained、すなわち乳児から投影される欲求に向かって開かれた母親の能力であり、これをBionは「もの想い」(Reverie)と名付けた。同じく、乳児によって母親の中に投影される悪い何かを「ベータ要素」(Beta-element)、母親によって「解毒」され乳児に返されるものを「アルファ要素」(Alpha-element)と呼んだ。ベータ要素とは、前述したように、変形されていない感覚的な印象や情緒経験「複数のものそれ自体」(things in themselves)を表し、それらは複数のものそれ自体として経験される。そして夢や記憶でなく、投影同一化を通して排出される。

このように、♂♀理論は初期の乳児と母親との相互関係を論じる際に用いられる名称であり象徴であるが、この関係は、そこに含まれる情緒の質によって、発達的にもなり得るし、また非発達的にも機能し得るものである。これら異なる2種類の♂♀を、Bionはそれぞれ「+♂♀」、「−♂♀」と記号化した。すなわち、+♂♀とは発達しつつある関係であり、−♂♀とは発達することのない、それどころか、有害な侵入を被り続け、それに対して分裂と過度な投影同一化を繰り返すことにより、内外界に奇怪な対象群を形成する可能性を持つ関係を表す。−♂♀は、精神状態の非常に悪い乳児、あるいは母親においてみられるが、そこでは、子供から投影された恐怖に対して母親が、貪欲や羨望や敵意に満ちたやり方で、投影されたものからその意味を奪う悪い対象として振る舞う。そしてそのものの恐ろしさは強化され、「訳の分からない恐怖」(nameless dread)として乳児の元へと返される。またこの関係は、精神分析においてもしばしば観察されるものである。

4. 症例

ここで、−♂♀の関係を例示するようなケースを提示してみたい。

クライアントAは、8歳男児、小学3年生であったが、学校へは不登校状態で、母親の都合の悪いときや友だちが迎えに来たとき、Aの希望など

で週に1～2回程度登校するも、必ず早退していた。母親の話では、2年生の終わりにキャンプへ行った際、食後に嘔吐したことがあり、それ以来登校をしぶるようになり、登校しても給食を食べないで帰ってくるようになったとのことであった。母親はAが、「普通に、楽しく」登校できることになることを望んでいたが、A自身は寡黙的で、その問題に対する意識や希望などを聞き出すことはできなかった。

また、別の心理士が実施したWISC-Rの結果から、知能的な問題は特に認められないということであった。面接は週1回60分、プレイルームにて行われることになった。自発的な言動が少ないことが大きな理由であったが、Aは初回のセッションからプレイルームへの入室や、そこで決められた時間を治療者（以下th.）と過ごすことに対して抵抗を示すことはなく、セッションを休むこともほとんどなく、3ヶ月目に入り、現在も継続中である。Aは、同じ遊びを繰り返し行うことが多いが、ここでは頻繁に観察されたいくつかの内容を取り上げ考察を行いたい。

・キャッチボール

Aはth.を自分の向かい側に立たせ、Aの投げるボールをth.が必ず「キャッチする」ように命じた。しかしAが実際に投げるボールは非常に勢いがあり、しかも、様々な方向へ飛ぶために、th.はどんなに頑張ってもすべてのボールを受け止めることはできなかった。それが続くとAは犬とブタのぬいぐるみを持ってきて、必ず犬を取り、th.にはブタを渡して、今度はそのブタの手でボールを受け取るように命じた。ブタの手足はth.や、犬のそれに比べても短く、まっすぐに飛んできたボールでさえ容易に受け取ることができず、th.は落ちたボールを拾ってはAに投げ返さなければならなかった。時には面接のほとんどの時間を費やして、二人はこのような、キャッチされないことを目的とするキャッチボールを続けた。Aはth.がそれをキャッチできないことにいらいらし、さらに乱暴にボール

を投げ始め、th. はますます受け取ることが困難になっていくのであった。

これは治療関係が開始された当初、何回ものセッションに渡って、繰り返し観察された現象である。この現象は－♂♀モデルによって以下のように分析されるであろう。

二人の間を行ったり来たりする「ボール」は、ここでは、Bion 理論によるベータ要素（＝♂）を象徴するものであると考えられる。

Aが th. に向かって放り投げた、乱暴な、どこへ飛ぶかわからないボールに乗ったベータ要素は、th. に「キャッチされる」ことなく地面に落ちたり、壁や天井へぶつかったりし、そして、Aの投げたのと同じくらいかそれ以上の強さをもって、訳の分からない恐怖としてAの元へと返される。するとAは、th. が自分の嫌いなブタであることを言い渡し、その無能さを確認するかのように同じゲームを繰り返すのである。

th. は、Aがわざとそのような、つまりキャッチできないようなボールを投げ付けて来るように感じ、そのことにいらいらしながらも、必死でそれを受け取ろうとしていた。しかし前述したように、実際には受け取ることのできるボールはほとんどなく、落ちたボールを拾っては返すことに、セッションが終了する頃には疲れ果てているような状態であった。th. はAの投影同一化に完全に支配され、自身の無力さとセッションの無意味さとを常に感じていた。

・救急車

プレイルームには、スイッチを押すことによってサイレンが鳴ったりライトが光ったり前後に走ることのできる救急車があり、Aはボールと共に、セッション開始当初、これを好んで使用した。Aが救急車を使用するときには、常にサイレンを鳴らしライトを光らせながら、th. に向かって車を走らせた。th. はこちらに向かって前進する車が手前まで来るとスイッチを押し、後進させてそれをAの元に再び走らせた。

このやりとりも繰り返し、いくつものセッションにおいてしばしば観察された現象である。

・終了時間

セッションの終了時間が近付くと、Aは時計を気にしながらも、新しい遊具を次々と出してきては、th.に指示したり甘えたりして気を逸らせ、終了することを阻止しようとするかのように振る舞っていた。th.はAのそのような態度に対して、Aが時計を気にしていることに気付いていながらも、時計を指し示し、終了時間を守るようにとAを急かすのである。Aはこれをなかなか聞き入れることなく遊び続けようとするので、それに対してth.は同じことを何度も言わなければならなかった。

th.のこのような態度が、前述した投影逆同一化によるものであり、母親とまったく同じ振る舞いであることに気付いたのは、偶然母親と話す機会を持った際であった。時間の変更を希望した理由について母親が説明するところによれば、Aがセッションの前日に「明日は学校へ行く」と言ったため時間の変更を希望したが、その夜遅くまで寝ようとせず、いつものようにおもちゃで遊んでいたので、母親は早く片づけて寝るようにと言ったが、それを聞き入れようとしないため同じことを何度も繰り返し言った。するとAは突然激しく泣き始め、「やろうと思っていたことを言われたから信用できない」と泣きながら言い、そして最終的には「やっぱり明日は学校へ行かない」と言った。この時に限らず、Aが学校に「行く」とか「行かない」とか言うことは、母親とA自身にとって、裏表になった最後の切り札のようなものであった。学校へ「行く」とAが言えば、母親は恐る恐る、この壊れやすい希望が現実となるために必死の努力をするのであるが、母親がそうすれば必ず、やっぱり「行かない」という裏の切り札をAは出すのである。母親はこの切り札に振り回され、結局は疲れ果て自信を失い、「私が何も言わなければ一番良いのですが…」と語るのであった。

th. は、Aの母親と同じように、Aの投影同一化によって支配され、その影響を受けるのであるが、th. のAに対する様々な機能不全、すなわち治療者としてのアルファ機能の不全状態は、前述した投影逆同一化的な、無意識的反応であると考えられる。

5．考察

上述した一つの症例における三種類の異なるエピソードは、十数回のセッションの中の様々な場面で繰り返し観察された現象であった。これらのエピソードは、ある共通したAと th. との関係を象徴するものであると考えられるが、それを明確にしてくれるのが、Bion の示した－♂♀モデルであろう。Bion はこのモデルを、病的な乳児と母親との関係を記号化するものとして用いたが、治療関係やその他の二者関係を表すために応用することができる。ここでは、Aの投げるボールや救急車などは、それに乗って運ばれるベータ要素、すなわちAにはそれと共にあることに耐えることができず投影同一化によって排出された内容を表すものである。アルファ機能を持つ母親であれば、これを受け入れアルファ要素、すなわちAが耐えることのできるものに変えてAの元へと返してやることができるのだが、th. はAの投影同一化に完全に支配されたためにアルファ機能の不全状態に陥り、投影逆同一化的反応、すなわち混乱し疲れ果て、どうしてやることもできない無力感に暮れる母親のように、無意識的に振る舞うようになっていたのである。

ボールや救急車の遊びは苛立ちと共に、うんざりするほど、何度も、そして長時間に渡って繰り返され、しかも徐々にエスカレートしていくのが常であった。ボールや車に乗って排出されたベータ要素は、th. に Containment されないことによって、さらに恐ろしく得体の知れないものとなってAの元へと返されるため、Aは直ちにそれらを再び排出しなければならず、そのためにAが用いることのできる唯一の方法である投影同一化は一層強め

られ、永遠に分裂と排出とを繰り返すようになるであろう。

今回提示したケースは、前述したように現在も継続中のものである。ごく最近では、Aとth.との関係にある変化が起こり始めている。Aはth.を、これまでのように向かい合わせに立たせるのではなく、その横に立たせたり座らせたりして、th.に様々な遊びやゲームのルールやうまいやり方について細かく教え、th.がうまくなるように監督している教官のように振る舞っている。さらにドアやその向こうについて気にしたり、誰もいない壁や天井に向かってボールを蹴ったりしている。Aは今や、Containerをth.以外に求めることにより、傷ついたth.やA自身を守ろうとしているかのように感じられる。

6．参考文献

Bion, W. R.: Attacks on Linkings. *International Journal of Psycho-Analysis, 40*, 308−315, 1959.

Grinberg, L.: The "Oedipus" as a Resistance Against the "Oedipus" in Psychoanalytical Practice. In J. M. Grotstein.

(Ed.). *Do I dare disturb the universe?:* Karmac (Books) Limited, 1983.

Hafsi, M.: The Dynamic of Projective Identification in The Therapeutic Process: A case of dependency projective identification. *Memoirs of Nara University, 21*, 301−321, 1993.

Hafsi, M.: The Anatomy of Projective Identification: Detecting, containing, and confronting sexual projective identification. *Memoirs of Nara University, 23*, 301−316, 1995.

Klein, M.: On Identification. *In Envy and Gratitude and Other Works, 1946−1963*, 141−175. New York: Delacorte Press/Semour Laurence, 1955.